

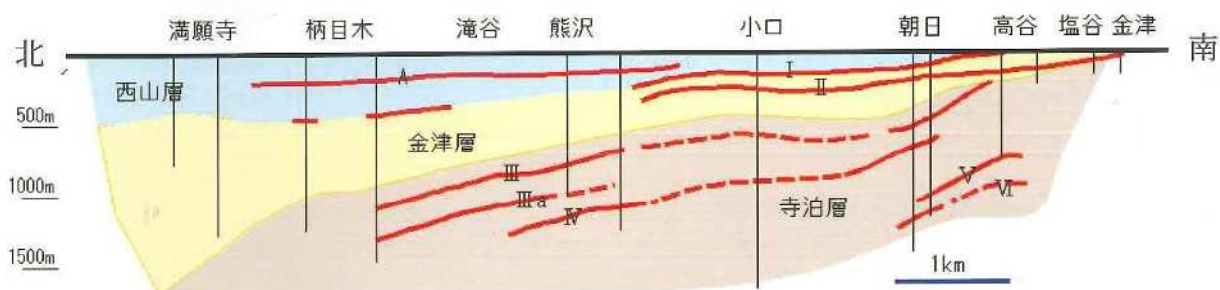
新津油田の開発史

新津油田の開発は日本でも古く、大正末までの総産油量は303万キロリットル、ガス1.2億立方キロメートルでした。新潟油田(新津、西山、東山油田など)の総産油量が722万キロリットルでしたので、新津油田は新潟の油田の中では第1位です。

1874(明治7)年に中野貫一は金津で手掘りをはじめました。手掘りであったので深さ50メートルほどの金津層から石油を採取しました。1893(明治26)年、上野昌治は鹿島大助の指導で煮坪付近で上総掘りをはじめ、113メートルで油層に達し成功しました。この深さの含油層も金津層の中の油層です。

1899(明治32)年、日本石油は熊沢で軽便式綱掘り掘削機で油層を掘りあてました。これも金津層の中の含油層です。その後、中野貫一も綱掘り式掘削機を導入し、宝田石油も進出して、小口、柄目木、滝谷でさかんに採掘され、1906(明治39)～1910(明治43)年には新津油田の第1繁栄期になりました。

新津油田の南北地質断面



赤線は含油層(A、I～VI)、縦線は坑井とその深さを示します。

新潟の石油開発に貢献した人

中野貫一

金津村の庄屋、中野家の長男として、1846(弘化3)年に生まれました。中野家は真柄家とともに寛政年間から石油の採掘権をもち、独占的に石油を採取してきました。貫一は1874(明治7)年、28歳のとき、金津で手掘りを始め2坑目で成功し、事業を拡大しましたが、すべて順調だったわけではありませんでした。1886(明治19)年に塩谷に手を伸ばした直後、日本坑法違反で鉱区権を没収されました。貫一は不条理、不当であると抗告、嘆願をくり返しましたが、らちがあかず、最後は知事を相手取って裁判で争い、1892(明治25)年に勝訴しました。いわゆる塩谷事件です。

1894(明治27)年上総掘り、1903(明治36)年に綱式掘削機を導入し、成功しました。1909(明治42)年に中野合資会社を設立し、日本石油、宝田石油につぐ石油会社となりました。石油王とよばれ財をなし、中野財団をつくり奨学金や学校建築に寄付し、公共のため貢献しました。1928(昭和3)年83歳で生涯をとおしました。

内藤久寛

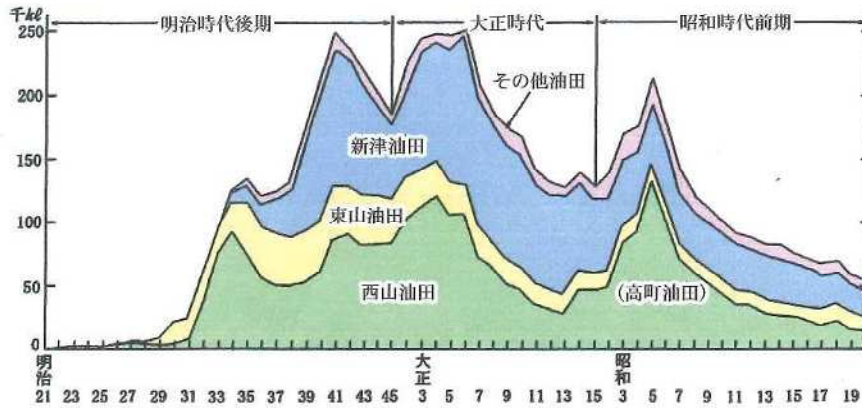
西山町石地の素封家に、1859(寛政6)年に生まれましたが、祖父の代に家産が傾き、火災で家を焼失するなど、かならずしも恵まれた環境ではありませんでした。若いときは東京、新潟に遊学しましたが、その後家業の酒造りに専念し、家運の回復をはかりました。

1885(明治18)年に27歳のとき、推されて県会議員となりました。その年、尼瀬現場で手掘りで濫掘(らんくつ)しているのを見て、豊富な資金と堅実な組織で石油開発に取り組む必要性を感じ、大地主で県会議員の先輩である山口権三郎と相談しましたが、思うようにいきませんでした。なかばあきらめていたところ、山口らが動きだし、日本石油会社が設立されることになり、経営を委任されました。

尼瀬の海底の手掘りをして成功しましたが、1890(明治23)年アメリカから綱式掘削機を購入し、110メートル掘削し、成功しました。その後、余裕ができたので衆議院議員となり外遊もしましたが、帰国後石油業に専念するため議員をやめました。1914(大正3)年、新潟県内の西山、新津油田だけでなく秋田県にも進出し、事業を拡大して、日本石油を日本一の石油会社にしました。1921(大正10)年宝田石油と合併し、社長となりました。その後、貴族院議員となり、日本の石油政策樹立のため働きました。1946(昭和21)年に86歳の生涯をとおしました。

1913(大正2)年ロータリー式掘削機が小口に導入され、さらに、朝日、柄目木でも深さ1000メートルまで掘れるようになり、金津層と寺泊層の石油が採掘されるようになりました。1917(大正6)年に、新津油田は第2繁栄期を迎えました。

その後、しだいに生産量が減少しましたが、採掘は続けました。1941(昭和16)年太平洋戦争が始まり、新津油田も減産の一途をたどりました。



産油量の変遷 (天然ガス鉱業会「日本の石油と天然ガス」, 1998)



1910(明治43)年、柄目木油田の大噴油

新津油田の開発史年表

- 668(天智天皇) 7月、越国から燃土と燃水を献上する。
- 1608(慶長13年) この年真柄仁兵衛、田家の山中で石油(煮坪)を発見する。
- 1613(慶長18年) 真柄(仁兵衛)は新発田藩主溝口家の許可を得て、石油採掘を始める。
- 1615(元和元年) 4月8日、真柄仁兵衛は石油採掘権を得る。
- 1694(元禄7年) 柄目木の真柄家は石油手掘りの方法書を新発田藩に提出する。
- 1804(文化元年) 石油採取の権利を坂井彦兵衛より、中野貫一の曾祖父次郎左衛門が190両で買い受け、以後石油採掘権が中野家のものとなる。
- 1873(明治6年) 7月20日、日本坑法制定され、楠本県令は真柄道三郎ら県下の鉱業者を新津町に集めて、石油業を奨励する。
- 1874(明治7年) 中野貫一石油業に着手する。9月20日、手掘2号井で初めて日量4キロリットルを生産した。その後は地下水の湧出による井戸の崩壊などによって手掘り井戸の掘削は困難を極め、殆どが失敗の連続に終わる。
- 1875(明治8年) 中野貫一は小製油所をつくる。
- 1876(明治9年) B.S.ライマンは新津油田を調査、重質油で灯油が少ないことを指摘する。
- 1877(明治10年) 中野貫一は朝日、塩谷、高谷で手掘りを開始する。
- 1886(明治19年) 中野貫一は金津で日産1キロリットル、塩谷で3.6キロリットル生産する。工部省は日本坑法違反の理由で塩谷での採掘禁止、鉱業権没収を示達する。中野貫一は真柄富衛らと4人で不当であると抗告、請願を繰り返す(塩谷事件発生)。
- 1891(明治24年) 中野貫一は県知事を相手に坑業禁止令取り消しの訴訟を行政裁判所に提訴する。
- 1892(明治25年) 裁判所の判決で、中野貫一が勝訴して賠償金3万5千余円を受け取ったが鉱区は戻らない。
- 1893(明治26年) 12月26日、上野昌治、草生水、煮坪付近で上総掘りによる石油掘削に成功(新津油田最初の上総掘り)。
中野貫一は金津地区の再開発のため、上総掘りを採用し、100メートル以上の掘進に成功した。重油燃焼法が発明され、新津の重質油の利用が拡大した。石油ブームが起こる。
- 1896(明治29年) 6月27日、鷺田種徳、小口で石油採掘に成功、小口はこれにより発展に向かう。
- 1899(明治32年) 日本石油は軽便式綱式掘削機を熊沢に導入し、成功する。
- 1900(明治33年) 新津恒吉、出雲崎から新津滝谷に製油所を移す。
- 1903(明治36年) 中野貫一、米国より綱掘式掘削機を購入して石油生産量が急速に増大する。5月、新津油田の出油量1日、217.8キロリットル(1210石)に達して、西山、東山両油田を凌ぎ、以後43年頃まで第1繁栄期を迎える。



明治38年頃、中野鉱業部金津鉱場



- 1904(明治37年) 9月、宝田石油会社、宝扇商会所有の製油所(日宝町)を買収し第3製油所とする(43年新津製油所と改める)。
- 1905(明治38年) 中野貫一の協力で小倉製油所を金津に建設して、39年から大正3年2月まで、月産534.6キロリットル(2970石)を精製して、菊花印、汽車印の商標で出荷する。
- 1906(明治39年) 中野貫一は中央石油会社を設立し、朝日、柄目木でも成功した。宝田石油は中小会社の買収、合併を進め、小口、東島、柄目木、滝谷で探掘した。
- 1907(明治40年) 2月、日本石油会社、滝谷に製油所を設立する。6月、新津町の鉱業者、皇太子(大正天皇)の熊沢油田ご視察を記念して碑を建立、さらに付近を整備して熊沢公園とする。碑の表題「皇太子駐駕処」。この年新津油田の産油量1,712,306キロリットル(951,700石)に達し最高となり以後次第に減少する。
- 1909(明治42年) 中野貫一は中野合資会社(資本金50万円)を設立した。中野合資会社は日産361キロリットルを採油した。新津油田全体で年産11万キロリットルに達した。
- 1910(明治43年) 4月29日、宝田会社所有の滝谷39号井が大噴出し、日産216キロリットル(1200石)に達した。同日柄目木方面では北方石油組合の2号井、中野合資会社のスター式1号井も続いて噴出、日産224.8キロリットル(1360石)に達した。以後多数の鉱業家が柄目木、滝谷の油井開掘に集中して、新津油田、全盛を極める。
- 1913(大正2年) ロータリー式掘削機を導入し、5月7日、宝田会社小口7号井、大音響と共に石油を噴出、噴出量1昼夜180キロリットル(1000石)に達し、これより日石、宝田、両会社の探掘競争時代に入り、出油量は飛躍的に増大して、小口油田の全盛期を迎える。
- 1914(大正3年) 8月、宝田会社、小口油田において電力による試掘を開始する(日本における電力による石油掘削の最初)。
- 1917(大正6年) 新津油田全体で年産12万キロリットルに達する。
- 1918(大正7年) 中野貫一、中野合資会社を中野興業株式会社(資本金500万円)に改め、大正9年9月、資本金2500万円に増資し、社業発展する。
- 1919(大正8年) 4月2日、中野貫一、私財100万円を提供して中野財団を設立する。
- 1921(大正10年) 日本石油株式会社、宝田石油株式会社、合併する。
- 1923(大正12年) 5月、川口三ノ堰関係の農民500名、日石新津製油所などへ鉱毒問題で抗議、警察隊に阻止される(日石製油所、新潟移転の遠因となる)。
- 1926(大正15年) 明治45年から大正15年頃までが第2繁栄期である。
- 1941(昭和16年) 太平洋戦争が始まり、南方油田開発のため掘削用具を一部撤収し、南方に送る。
- 1942(昭和17年) 戦時体制で、石油開発会社は国策会社帝国石油に一本化される。
- 1947(昭和22年) 戦後復興し、年産2.5万キロリットルを生産する。
- 1958(昭和33年) 9月、帝国石油(株)新津鉱場が金津に「開基坪」の碑を建立する。
- 1968(昭和43年) 8月、帝国石油(株)より、かつて中野興業(株)が開発した金津油田の鉱業権を譲り受け、丸泉石油興産(株)を設立して、採油事業を続ける。
- 1975(昭和50年) 9月4日、草水の「煮坪」が史跡として、新津市文化財第1号に指定される。
- 1996(平成8年) 3月31日をもって丸泉石油興産(株)は石油採取の事業を停止し、新津油田の生産が完全に停止する。